南一弘の

街を行く

第114回 Stay Home

街に行けない（その2）

緊急事態宣言に基づく外出自粛の真っ最中、普段活気で漲っていた全国の街々が、ただしんみりと、その存在を隠すかのごとく佇んでいます。今回も「街に行けない」シリーズでお送りいたします。

「Stay Home」の掛け声は、その通りですので反論の余地はありません。とはいえ家に引き籠もる日々がこうも続くと、かなりのストレスを感じていらっしゃる方も多いと思います。小生、ストレスからかわかりませんが、このところ体調を崩しておりました。まったくもって何を恨めば良いのやら、ストレス発散する術がない状態というのは本当に困りものです。「見えない敵と戦うことは、これほど大変なものか」と、よくよく教えられました次第です。

さて皆さん、考えたことがありますか？これまでの人生で「自分はどんな街に住んできたのか」を。生まれた街、育った街、働いた街、家庭を持った街などなど、色んな街と関わり合ってこられたことでしょう。

そこでまずは、「自分の住んできた街」を思い出してみて下さい。次に、街が時代とともにどう変わったのかを考えてみましょう。

長い歴史の中で、日本の街は信じられないほどの速度で変化してきました。東京や大阪の大都市では、もはや過去を思い出すことすらむずかしいレベルです。

街の変化は人々の需要の反映であり、発展の源であり、利便性向上の証とも言えます。それと引き換えに伝統が失われ、情緒が捨てられていきました。

「便利さ」という物差しが街の価値を測る判断基準となってしまったためであり、測れない街は社会や経済のシステムから切り捨てられたのです。多くの地方都市は切り捨てられた街の典型だと言えましょう。

そんな地方都市が、新型コロナウィルスの影響をさほど受けていない、というのは皮肉なものですよね。在宅勤務やリモートシステムの発達で、これまでの街の在り方や街の価値の測り方が変わるのは必然となりました。また、変わり方のスピードはこれまでの便利さを追求してきたときよりも速いでしょう。

Stay Home脱出の日を願いつつ、白山神社（和歌山県）に神頼み

いつものことですが、「過去の発展を壊す」のが、「これからの発展」です。経済学ではシュンペーターの言う「創造的破壊」ですね。

今後起きてくることは、新しい生活環境の中で、街がいかにそれをサポートする場として使われていくかです。ですから、一極集中ではなく、多極分散されていきます。

今後の街は、新しい価値観の中で「使われる」街として選ばれなければなりません。わざわざ地方都市から東京に出てこなくても十分に仕事が出来る環境が出来上がっていきます。したがって、街は「個性」を持たないと誰からも選ばれなくなります。人が選んでそこで生活していかないと街は意味を持ちません。与えられた街ではなく、住む人が作っていく街でもあるのです。先月と今月では理屈を述べてきましたが、このコラム本来の街歩きはいつになったら再開できるのでしょうか。来月には再開できるように望むだけです。読者の皆さんはくれぐれも体調にお気を付けください。

南 一弘

1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発（旧松下興産）の代表取締役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役に就任。